今回の報告について

～ 日本英語検定協会 名誉顧問より ～

名誉顧問　長　勝彦

高等学校のライティング指導における生成AIの活用とその効果
―機能適切さ（Functional Adequacy）に着目して―

本年度は，AIを英語教育のテーマとして取り上げた研究報告が複数見られた。なかでも，渡邊大志先生の研究は，生成AIを高校のライティング指導に導入し，その教育的効果を実証的に検証した点に特色がある。研究に当たって，実に数多くのAIに関する文献から引用して研究報告を作成している。今後．AIに関する英語教育研究・AIを取り入れた英語授業実践など，AIに関して調査する際，少なくとも，渡邊大志先生が本研究報告書にて引用した文献一覧は大変参考になる。

来年度よりの「英検」研究助成報告に，研究部門，実践部門，調査部門にて，AIの活用とその効果等に関する多くの報告書の応募を期待します。

最後に，日本全国の英語研究会にて，可能な限り渡邊先生の今回のテーマを取り入れた授業を公開して，英語教育に貢献して欲しい。

◆　◆　◆

名誉顧問　村木　英治

ChatGPTについての研究

つい最近私もChatGPTをやり始めた。試しに自分の名前を入れ「この人？」と聞いてみた。ネット空間に挙がっている私についての文献はほとんど記憶しているのだろう。敬意を感じさせながらそれらをうまくまとめて表現してくれた。気をよくして，「あなたは英語義務教育に役立てますか？」と尋ねてみた。ChatGPTの反応はすこぶる早い。意外な例も含まれている。便利なアプリである。

しかしその応答には責任感が感じられない。無人間レベルで動く生成AIには，教師と生徒という関係が重要な教育現場に応用される方策の一つ一つは注意深く実行されるべきであるという責任感はないのかもしれない。今回は大和田氏の論文を含めて3篇も生成AIの研究があった。それだけ議論が切迫されているのだろう。それに答えられるのは，しかし教育問題に愛情をもって取り組める研究者だけだ。AI工学分野に確固とした力を持ち，かつ教育問題にも熱意をもって取り組める研究者がここから育つことを願っている。それがChatGPT自身の教育にも役に立つ。

名誉顧問　小池　生夫

研究助言の長い年月を経て思うのはすべて感謝である

私は最近老化現象が形を成すようになってきた。今年度は研究部門5, 実践部門5, 調査部門1件の研究論文を読むのに, 本来なら不必要な長い時間がかかるようになった。また, 論文執筆者全員が第一級の研究者であると感じた。

本年度の特徴は, すべての部門でさまざまな数理統計モデルを利用して説得力のある論文を書いていることだ。明解な分析をみせてくれた。この傾向は, 初期は研究部門だけの特許販売であったが, 回数を数えるうちにこの傾向がはっきりし, ついに3部門全体の研究に及ぶことになった。これは今後しばらく続くであろう。そして次の時代は,「生成AI」の利用に関する研究であろう。そしてさらに新しい多様なモデルを使っての研究発表が一般的になるであろう。この傾向は説得力があり, 助言者の助言でも, それに積極性を持たせようという意図がみえる。研究者, 助言者ともに, 数式によってその特徴を明らかに引き出すことをよしとする研究分析方法が, 全体的に歓迎されるようになる。そういう傾向が決定的になったことを意味する。ある特定の結果が数字, 数式の利用によって, より明白になったことを示すものといえよう。初代の助言者, 指導者のひとりとして, ついにこの段階まできたかと思う。今後この傾向は一層明白になり, 何のモデルを利用するのが適切かを検討することが研究者本人ばかりでなく, 指導助言者の興味を引くことになろう。これが新しい傾向になる。

これがよいかどうかは慎重に考慮することとし, まずは納得することになろう。私は長年指導助言をしてきた者のひとりとして現役の研究者, 指導助言者に対し, その努力を尊重し, 激励し, 深く感謝の気持ちを表したい。

応募研究者, 各指導者, その他の助言者の皆さん, 本当にご苦労さま。皆さん相当のエネルギーを注いでくださった。その初期から今日まで, その真摯なる才智と努力に対し高く評価したい。それは私自身よく認識してきたからである。最後に事務局, 研究者, 研究助言者諸氏, 今後とも才智と誠実なる努力をこのプログラムに注がれるよう望んでやまない。